



露伴全集

第二十八卷

昭和二十九年十月十日印刷  
昭和二十九年十月十六日發行

露伴全集第二十八卷

頒價六百五拾圓

著作權者

幸田文

編纂

蝸牛會

發行者

東京都千代田區神田一ツ橋二丁目三番地  
岩波雄二郎

印刷者

東京都青梅市根ヶ布三八五番地  
山田一雄

印刷所

東京都青梅市根ヶ布三八五番地  
精興社

發行所

株式會社

岩波書店

東京都千代田區神田一ツ橋二丁目三番地

電話(代表)九段(33)八四八六番  
振替口座東京二六二四〇番

牧製本

# 目次

## 修省論

簡易の好光景	大正二年二月	二三
顛倒の妙作用	大正二年七月	三一
公德公益と私徳私益と	大正二年八月	三六
自助互助と自棄互棄と	大正二年十二月	四二
窮境の功徳	大正二年一月	四九
悲觀の效能	大正二年九月	五六
使用する者の苦樂、使用さるゝ者の苦樂	大正二年三月	六二
犠牲となる事の是非、犠牲とする事の是非		七五
過程の短縮	大正二年十月	九四
摩軌の少減	大正二年十月	一〇二

感情の精粗偏圓	大正二年三月	一〇七
生活の空實疏密	大正元年十二月	一一四
兩端	大正二年四月	一二二
三毒	大正二年六月	一二九
同生活の昇降	大正二年七月	一三五
無意識の壓迫	大正元年十二月	一四一
自然的の齟齬	大正二年二月	一四九
可能率の擴張	大正二年六月	一五六
自ら教ふるの努力	大正元年十一月	一六二
人を信ずるの苦行	大正二年五月	一六七
一樣の資格の階級	大正二年九月	一七九
同級の感情の超越		一八六
得力の處		一九三
自遂の功	大正二年一月	二〇一

黴菌の如き生滅 大正二年十二月

二〇六

根本に對する培養 大正三年二月

二一〇

生産力及生産者 大正三年二月

二一四

## 快樂論

緒論 大正五年四月

二四三

物質的愉快と精神的愉快の意義 大正四年一月

二四八

人間の進歩と快樂の向上 大正四年二月

二五五

快樂の眞味は過去と未來にあり 大正四年二月

二六一

自由の想像境の快樂 大正四年四月

二六七

色聲香味觸の快樂 大正四年五月

二七二

愉快と教育 大正四年六月

二七七

人間性の愉快と動物性の愉快 大正四年六月

二八四

準備の樂しみ 大正四年八月

二九〇

獨立の愉快 大正四年九月

二九六

大に至るの愉快 大正四年九月

無愉快の愉快 大正四年十月

我を擴むるの愉快 大正四年十月

快不快の超越 大正四年十一月

淡き愉快 大正四年十二月

愉快の前 大正四年十二月

悦樂 大正四年七月

悦

樂

不愠

無益

一貫章義 昭和十三年六月

後記

三〇二

三〇九

三一五

三二一

三二六

三三二

三三九

三四七

三六七

三七七

三九八

四三三

四九三

修省論





## 自序

修省の二字は大象傳たいしょうでんに本づいてゐる。君子以て恐懼修省すとあるのが其の文である。數往知來の道は、恐懼を以て吉と爲し、開物成務の業は、修省を以て大を成すのである。恐懼して修省し、修省して恐懼すれば、天の祐は日に加はり、人の徳は月に進むであらう。たゞし今の世に當つて、修省の我に取つて重要なことを知らぬ人は少いが、恐懼の己に對して緊切なることを思はぬ人も少くは無い。時代の人情風氣の差が然らしむるのであらうが、天をも畏れず、神をも敬せぬのが、今の人である。隨つて今の人に缺けて居るのは恐懼の氣分であり、又今の人の有することを欲せぬのは恐懼の心狀である。然し恐懼といふことは、決して卑小なことでは無い。眞摯な、敬虔な、正直な、謙遜な、そして奥底に勇猛精進の大精神を懷いて居るものは、かならず恐懼するところが有るべき譯である。其の恐懼よりして、自ら小なりとして漸く大ならんことをこひねが希ひ、自ら弱しとして漸く強からんことを希ひ、自ら智無しとして漸く智あらんことを希ひ、自ら徳薄しとして漸く徳あらんことを希ひ、自ら頼むところのものも有る無しとして漸く頼むところあらんことを希ひ、自己の一切の過去と現在とに

對して、すべて足れりとする事無く、美しとすること無く、義なりとすること無く、愾ずらくとして恐れ懼れて眞の努力を敢てせんとするのが、人の本然の心狀ではあるまいか。其の何を恐るゝのであるか、何に懼るゝのであるかは、姑く問はずして可なりで、之を神なりとするも之を天なりとするも、それは言語の差のみと觀じて宜いが、何かは知らず主一無雜の恐懼の心狀に入つた時が、吾人の最も眞實の生活を現じ得た時で、そして其の爲に大に力づけらるゝことは、蓋し多くの人の驗知するところであらう。吾人は吾人の生活を眞實にし、吾人の生活を充實する爲に努力するを宜しとする。が、其の努力が恐懼に聯結するもので無ければ甚だ根柢の淺いものであつて、その努力が永續し得るや否やが疑はれる。努力の道は乾けんの道である。自ら彊つとめて息やまざるのである。しかも乾の三には、肅敬恐懼の缺く可からざることが示されて居る。夕てきじやくに惕おそ若やくたれば、厲あやふけれども咎とが無し、とあるのがそれである。又肅敬恐懼を忘れて高亢の狀に在るものの危きことが、乾の上に示されて居るでは無いか。亢龍悔有りと、すなはちそれである。震しんは乾の長子であつて、其の鼎を受け業を紹つぐものである。この震の象傳に、恐懼修省の四字が示されて居るのは、如何にも意味深遠で、そして乾の大徳たる剛健中正純粹精といふが如き至強至大至美のものに肅敬恐懼の心の聯結されざる可からざるかを、其の三爻上爻の辭意と共に、吾人に諒つげて居るものである。震來る虩けきたりとは、恐るれば福を致す也と象傳にも爻傳にも見えて居る。此の恐るれば福を致す也といふのは、すなはち恐懼修省の事を語つて居る

のである。眞に恐懼せずんば、眞に修省せず、眞に修省せずんば、眞の努力は爲せず、眞の努力が爲せねば、眞の天祐は至らぬのである。自ら大なりとするものは最も小なるものである、自ら強しとするものは最も弱きものである、自ら智ありとするものは最も智無きものである、自ら徳ありとするものは最も不徳のものである、自ら頼むところありとするものは必衰必滅のものである。自己の一切の過去と現在とに對して、自ら足れりとし自ら美なりとし自ら義なりとするものは、肅敬恐懼の眞境より墮落して、漸く眞の努力に遠ざからんとするものである。恐懼を知らずんば、いづくんぞ修省を知らんやで、又修省を能くせずんば、いづくんぞ努力を能くせんやである。吾人は肅敬恐懼すべきもの前に立つて、肅敬恐懼し、終日自ら強めて息まらずして、而して夕に惕若たらんと欲すべきである。我恐懼し、我修省し、我努力して已まず、我かならず吾が一舉手一投足の間に天祐の漲溢みなぎりあふるゝを見んと信ずる。易に天より之を祐たすく、吉にして利あらざる無しとある。眞に天祐を得れば、天下何をか思ひ何をか慮おもらんである。義を精にして神しんに入り、用を利して身を安んずべきである。

大正三年仲春

露伴學人識

## 目次

## 簡易の好光景

.....三

社會の事相の繁縟と紛紜——文明の價値——眞の生活の意義と世俗の文明と——人の人たる所以——人の欺く可からざる要求——偏倚せる進歩——物質文明の進歩と經濟事業道德——簡易生活——物質文明に掩はれたる社會に對する反抗——質朴淡素な生活狀態——世態後退の不可能——人の理想と世の大勢と——世狀は猶大河の水面の如し——人情の自然——河水は逆流せぬ、社會は後退し難い——人をして監獄に在らしめんとするに同じき論——他人に對すると自己に對するとの差——自己腔子裏の自由——個人の權利は自己に對して絶大也——自ら省みて簡易なるべし——簡易即大道德——努力して止まざるは易の徳——努力と易と——恆に易にして以て險を知る——易は艱難を生ぜず——持續して止まざるは簡の徳によらねばならぬ——持續と簡と——恆に簡にして以て阻を知る——簡は煩亂を除く——生活の豊富は簡易の中に存せん

## 顛倒の妙作用

.....三

順當——自然の位置關係——事物の緒次——顛倒の妙作用——雇主と被傭人との喩——

——顛倒の如くに見える——顛倒より起る光景——身を以て衆を率ゐる——權利義務の思想——彌伽大士——求道者を尊重せる古菩薩の態度——人間相互の作用の妙——毒惡の作用と危険なる思想の世に生ずる一原因

### 公德公益と私徳私益と

三

公德私徳の差別——二途一水——公私の徳は無差別——公私の益も亦無差別——公益私益の差別——久留米耕の例——私益公益となる——公益私益となる——公私の利益の正比例的なる事業——公私の利益の一致——公益を害して私益を圖る結果——公益と一致せぬ私益——公益を問題外として私益を圖るの弊——魔王の奴僕——盜賊思想、未發達思想——油屋は油屋、豆腐屋は豆腐屋——私益を圖る者斥く可からず、公益を圖るもの稱す可からず——公私の名に拘泥するは愚——公益の正比例的關係の尊重

### 自助互助と自棄互棄と

四

自助の精神——自助の精神の偏長の弊——日本人は自助の精神に富む——邦人の自助の精神の強き所以——自助の精神強き半面——互助の精神に富まぬ——互助の精神の乏少の國民——我が國の文學教訓宗教と互助の精神と——同行——我邦佛教徒と互助の精神と——立教當時の佛道と互助の精神と——互助の精神を以て一切世間を醇化——彌陀宗の徒の互助精神——たゞ一の融通念佛宗のみ互助の精神を重要視したり——

互助精神乏少の不利——實業家ほど互助の精神に乏しい——自利の經營に急にして互助の精神に乏しき結果——排他の精神及び行爲——自棄の情の危険——自棄の情より墮落に至る凡人の常情——互に傷け互に棄つる——世故に老いたる者の心の奥の祕密及び其の結果——互助は競争よりも賢し——排他、自棄、互棄、互傷

### 窮境の功德

貧窮の定義——聖賢なほ貧窮を喜ばず——人誰か貧窮を喜ばん——窮通は不可測——貧窮の中に餘裕あるを得る人——然し貧窮は必らずしも無益に終るか——水は常に冷、火は常に暖、貧窮必らずしも人を苦めず——貧に對する一轉語——貧は人を苦めず人貧に苦む——貧は隨意に來る——貧は隨意に去る——貧を厭ふは免れ難き人の情——貧の嬉しき——貧窮に對する觀念轉換——貧窮の功德——貧は人を鍛ひ鍊る——第一功德——貧窮は友を洗ふ——第二功德——貧窮は眞を悟らしめる——第三功德——源頭の光景——虚飾も無ければ我慢も無き心——貧窮は人を養ふ——第四功德——文明と貧窮

### 悲觀の效能

悲觀——悲觀は尊貴の一感情——自己一個のみを一切の根本——極端の個人主義者は悲觀を有せず——自己中心、自己擴張は最高最貴の所爲ならず——悲觀の生ずる場合

矣

兇

——猶未だ悲觀を懷くに至らざる農業者——漸く悲觀を懷くに至れる農業者——選種法の喩——吾既に得て人未だ得ず——人類の尊貴なる情緒——仁、愛、悲觀——悲觀は多くの自利の念の満足の後に生ず——社會の進歩と悲觀と——悲觀者無き社會の慘景——悲觀者が多くなれば社會は愈々幸福——國家と悲觀——怯觀——悲觀と怯觀と使用する者の苦樂、使用さるゝ者の苦樂……………三

互恵相助——社會は羅網の如し——使用者被使用者の關係——二者は相持——使用者に對する我が邦の習慣——扶持——被使用者扶持さるゝか使用者扶持さるゝか——實際に於ける使用者被使用者の關係狀態——利福の比例の不一致——社會主義——資産に關する思想——互扶互持の對等關係である——被使用者の反感——使用者の惡感——同情は能く解するに本づく——使用者の苦——事業の精神眼目——微細の注意に巨大の價値あり——少員營業の進歩と多員營業の退歩と——事業發展の閉止理由——精神が被使用人に會得されぬ非營利事業の結果——被使用者の苦——被使用者の精神技倆——被使用者の満足愉悅——人に知られざる時は慍る——使用者と被使用者との間の冷酷なる關係——使用者被使用者間の惡狀態の最後——使用者は被使用者の材意氣を認める——被使用者は使用者の精神眼目を解する——被使用者の不安定性——使用者に苦痛を與ふる被使用者の一性質——信頼は安定といふ事の成立つて後に生ず——



— 信頼とは或時間を充たす確實さ——安定性の缺乏せる被使用者——一時間毎に鍵を巻くを要する時計——法律づくめの無効——使用者の不確固——頼もしくからぬ使用者——被使用者を保障する契約——被使用者の安全を保障するは使用者の利益

犠牲となる事の是非、犠牲とする事の是非 ……………… 七五

犠牲——犠牲の本義——三種の場合——人は容易に犠牲たらず——第一、犠牲となるの可否——第二、犠牲を受けるの可否——第三、犠牲とするの可否——人は犠牲たるを欲せずして犠牲たるものを稱讃す——赤裸にせる通常人の心状——人の理想は世の権力に反抗す——犠牲となることは實に實際社會には稀有なことに屬する——人の胸裏の事——犠牲とならんとするの心は萬人の胸中に潜在して居る——稀有の事實、普存の心象——神は不明不定——神と犠牲——受くべきものは唯神のみ——授與——贈遺——人に犠牲を受くる権利無し——幸壽丸と美女丸と——橋姫と日本武尊と——傳説上善人は犠牲を甘受せず——人は犠牲を受くるを肯てせぬ——偽神と犠牲と——犠牲を請求する者は強盜——神でゞも有るが如き顔をして犠牲を收むる——項羽と犠牲と——自己を犠牲とする——豪傑は部下の犠牲となる——豪傑、奸雄、野心家——妻を犠牲とするの権利——回教モルモン宗等の如くに——彼異則此異——中性的ならざる言論——人を犠牲とせんとすれば人と人と相食むに至らん——誇大妄想狂者と犠牲